２０２４年３月３１日　青戸教会　イースター礼拝「復活」　高橋克樹牧師
イザヤ書５５章１～１１節、ヨハネ福音書２０章１～１８節

ヨハネ福音書２０章によると、主イエスの復活の出来事は、主イエスが埋葬されていた墓にマグダラのマリアが朝早く行ってみて、その墓の入り口をふさいでいた大きな石が取り除けてあるのを見たところから始まります。そこでマリアは走って行って、シモン・ペトロと、イエスが愛していたもう一人の弟子のところに行き、その事実を彼らに伝えたのです。その際に、「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません」と告げています。

そこで２人の弟子は一緒に走ってイエスの墓に向かいました。パトロよりも、イエスの愛弟子が先に墓に着くと、身をかがめて中をのぞいたところ、亜麻布が置いてあるのが見えたのでした。けれども、この愛弟子は墓の中には入らず、シモン・ペトロが到着すると、ペトロが墓の中に入り、亜麻布が置いてあるのを確認したが、イエスの頭を包んでいた覆いは亜麻布とは離れたところに丸めてあった。ところが、８節によると、ペトロにつづいて墓に入って来た愛弟子は「見て、信じた」と書いてあって、墓の中に主イエスの遺体がないことを見て、マリアが言ったように、主イエスの遺体が誰かによって取り去られたことを信じたのでした。これに対して、９節によると、イエスが死者のなかから復活されるという聖書の言葉を２人まだ理解していなかったと但し書きがなされています。つまり、主イエスの復活の出来事はまだ弟子たちには理解されていなかったのです。

さて、主イエスの遺体を収めた墓というのは、当時、崖の斜面に横穴を開けて遺体を収めたようです。ですから、墓の入り口を大きな岩でふさいでおいたのです。ですから、岩が取り除けてあると、墓の内部を身をかがめてのぞき込むことができたのです。

１１節以下では、マリアが墓の外で立ちながら泣いていたという描写から始まります。マリアは墓の中を身をかがめてのぞき込むと、イエスの遺体が置いてあったところに、白い衣をきた２人の天使が見えたのです。天使たちがマリアに「婦人よ、なぜ泣いているのか」と尋ねると、マリアは「わたしの主がとり去られました。どこに（遺体が）置かれているか、わたしには分かりません」と答えたのです。ところが、マリアは後ろを振り返るとイエスが立っておられるのが見えたのです。けれども、マリアはそれがイエスだとはわからなかったのです。復活したイエスが「なぜ泣いているのか。だれをさがしているのか」と尋ねると、その人物が園丁だと思い込んでいたマリアが「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。わたしが、あの方を引き取ります」と言ったのでした。それに覆いかぶせるように、復活したイエスが「マリア」と呼びかけると、マリアは振り向いてヘブライ語でラボニ、つまり先生と答えたの

でした。こうして、マリアはイエスが死者のさらにイエスは、中から復活したことにきづくことになったのです。さらにイエスはマリアに神のもとに私は上ると語り掛けて、こののち、マリアは弟子たちのところに行って「私は主をみました」と告げたというのです。

その日の夕方、弟子たちがユダヤ人を恐れて、自分たちがいる家の戸に鍵をかけておびえていたところに復活したイエスが現れて、「あなたがたに平和があるように」と言って、十字架にかけられた印がわかるように、手とわき腹を見せると、弟子たちは、その人物がイエスであることを知って喜んだのでした。

こうして、空虚な墓の出来事に続いて、起こった一連の出来事によって主イエスが復活したことが弟子たちに信じられることになったのです。ただし、これらの記述は弟子たちの主観的な体験を記した出来事です。ですから、イエスの復活の出来事を客観的に証明することはできません。

初代キリスト教の弟子たちが体験したイエスの復活は、自然の法則を超越した出来事であり、信じるしかそれを肯定できない類のことです。イエスが生きた当時のユダヤ教の時代精神で言うならば、旧約聖書は復活に対して否定的でした。ところが、この考え方が変化するのは、紀元前２世紀にアンティオコス四世が行ったユダヤ教迫害の時代に、迫害によって殉教した者に対して、神が報いとして死者が肉体を持って復活する希望がもたらされるようになったことに起因しています。復活したイエスが自らの十字架の傷跡を弟子たちに見せるのも、死者が肉体を持って復活するという当時の考え方を反映したものです。けれども、主イエスの復活において大切なことは、主イエスが自分の力で復活したことではないのです。先ほど、申し上げたように、迫害によって殉教した者を神が報いるために復活させるということが主題になっているからです。ですから、福音書のなかでの主イエスの復活は、文法的には受け身形で描かれています。神が主イエスを復活させたことが、主イエスの復活の出来事だという理解なのです。

復活したイエスは神のもとに召天していきます。ですから、主イエスの復活を信じる信仰というのは、死んだ後も神の御憐れみによって生かされ続けるということに希望を持つということなのです。それが永遠の命を信じるという私たちの信仰の源泉になっていることなのです。主イエスと同じように、死ぬことは神に召されることであり、神に召された死後も神の愛に生かされ続けることが永遠の命に生かされてあるということなのです。神の愛が生物学的な死を越えて死者を生かし続けるという希望を言い表した出来事が主イエスの復活であり、その復活を信じることは、自分の生物学的な死に遮断されることなく、神の愛のもとで生き続けるということなのです。生物学的な死でもって、神の人類に対する愛は断ち切られないということが、主イエスの復活地、そのことを信じて永遠の命に生きる希望を持っている、わたしたち信仰者を生かし続けているのです。この恵みに感謝して、信仰の道を歩み通してゆきたいと思います。